東方弱虫録1 ～BADEND
R18
Adult Only

東方弱虫録１〜BADEND

カムケン

しっぽ漬

ＢＡＤ０　もしも勇気が妖怪に食べられる展開になっていたら？

稗田阿求に上白沢慧音に会うように言われ、斎藤勇気は里の寺子屋に来ていた。
学校というより塾や習い事で使うような施設のように感じた。畳部屋に座卓が二十数個、教務用なのか大きな座卓が一つ、黒板が一つ。畳部屋は十六畳くらいしかなさそうだ。
「今日はよく来てくれた」
奥の障子の部屋から出てきたのは教師というより顔立ちからは少女に思えた。腰まで届くほどの長さ青のメッシュの入った銀髪。頭にはリボンの付いた青い帽子で、六面体と三角錐の板を挟んだような形をしている。青色の衣服は胸元が大きく開き、赤いリボンを着け、上下が一体になっている。下半身のスカート部分は何重にもなった白のレースが付いている。
勇気は何度もその服と顔立ちは見比べた。帽子は教師っぽいのだけれど、少女でより人間っぽい。
この人が阿求さんが言っていた半妖、ワーハクタクと呼ばれる半獣人の教師なのだろうか？
「えっと……」

「すまない私が上白沢慧音だ」
「貴方が慧音さんですか？　いったいボクになんの用があるんですか？」
半分が妖怪である為、食材にされるのではないかと不安になるのだけれど。
「どうやら不安にさせてしまったようだな。歴史書を纏めたくてな。特に君に何かをさせようとか、とって喰う訳じゃない」
勇気の不安顔に目についたせいか慧音は笑顔でそう言う。確かに人が良さそうな感じはするのだけれど。
「歴史書ですか？　ボクの何かを話せば良いんですか？」
「特に何もしなくて良い。ところで風呂に入ってくれないか？　勇気だったか？　君の歴史書を書くのに準備がいる」
お風呂？　どういう事だろうか？　準備に時間がかかるから？
「……分かりました。お風呂、お借りしますね」
勇気は慧音が指差す方向に向かう。
すると、そこには浴室があった。児童の為に用意したものだろうか？　何人も入れそうなぐらいに幅と底が広そうであった。
風呂場の浴槽は五右衛門風呂であった。裏手の庭からパチパチと薪が燃える音が聞こえる。
身体を洗ってから浴槽に浸かる。お湯の温もりが優しく包み、ぬるぬるとした感触が全身を……
「あうっ!?　なにコレ!?」
入浴剤かと思ったのだけれど、茶色く味噌風味の匂い。そして細かいキノコの断片がぷかぷかと浮いてる。

五右衛門風呂から出ようとするが、ぬるぬるとぬめり、取っ手が掴めない。それになんだろう……身体が熱を帯び、おかしな気分になってくる。
何度か思い切り取っ手を掴むと、滑ってキノコ汁が顔まで浸ってしまう。
身体がかゆい……掻いても掻いても、身体にキノコ汁を塗りつける行為となり、快感となっていく。
あっ……いちもつが痒い。勇気は勇気は何を思ったのか、ぬるぬるのキノコ汁を手に塗し、いちもつをしごいていた。
いちもつをしごき続ければ、快感で痒みを忘れるのではないかという安易な考えだった。
快感が絶頂に達し、ドピュッドピュッと精子をキノコ汁に放っていた。
「……手が止まらないよ」
かゆさを紛らわす為にいちもつを何度もしごき、キノコ汁に精子を放っていた。
白濁がキノコ汁に浮き、背徳的な気分になる。
「良い出汁が出てきたな。妹紅に貰ったキノコが媚薬効果があると知ってな、キノコ汁風にしてみた」
顔をだしたのは慧音だった。女性とは思えぬ力で持ち上げ、敷き藁に寝かせる。
「どうして……こんな事を……」
「さっき話した通りだ。歴史書を作りたくてな。お前の歴史を食べやすいように下味をつけた」
「歴史を食べる？　何を言って……」
「言葉通りの意味だ。今夜は満月だ。ワーハクタクになる前に歴史を喰ってやる」
気のせいか、慧音の髪が緑色っぽくなり、服もそれに合わせたように変色していく。

「えっ？」
慧音の顔が間近に迫ったと思いきや、勇気の肩を舐めていた。その舌がキノコ汁塗れの肩を舐めとっていき、怪しい糸を引き始める。
「妹紅より私の方が好きだと言わせてやる」
「妹紅さんの知り合い？」
「お前は妹紅の事が好きなのか？」
どういう事なのか分からず、咄嗟に答えた。
「す、好きですよ」
「……やはりそうか。こんな事はしたくなかったが、しかたがない」
慧音の舌は勇気の身体に這い回り続け、唾液とキノコ汁でいっそうにぬめぬめにしていく。
「止めてください!?　こんな事して……恥ずかしくないんですか！」
「恥ずかしいもんか。お前の歴史は全て私が貰うのだからな」
「何を言って……!?」
気づいて身体を見ると、慧音に舐められた部分が消えかかっている事に気付く。
「お前の身体が全て舐め取られる頃には誰にも認識されなくなる」
「そんなの嫌だよ！」
逃げようとするも、ぬめぬめの身体がいうことをきかず、ナメクジのように這い回ることしかできなかった。

「無駄だ！」
慧音の腕が勇気の身体を押さえつけ、いちもつを舐め上げた刹那。勇気の身体が魚のように跳ね上がり、白濁をその顔にぶちまけた。
「あああっ!?」
「情けない奴だ。一舐めでイってしまったのか」
顔が白く染まり、ドロドロなのに関わらず慧音は気にせずに舐め続ける。
「そんな……」
「安心しろ。恥ずかしさもお前の早漏れおちんちんも美味しく喰ってやるからな」
痛みはない。いちもつを舐め続けられ、快感が走り続ける。その性感帯すら無くなってしまうというのに、勇気は何もできずにいた。
「やめてよ……」
「どうした？　抵抗しないと全て消えてしまうぞ」
慧音を振り払うおうとするが、その手すらもしゃぶられてしまう。
「ああ……」
「お前の手は美味いな。癖になりそうだ」
「手を離して！」
慧音の口から手が離れると、まるで無かったように消えていた。
「ん？　お前に手なんかあったのか？」

「ボクの手を返してください……」
「お前に手なんてない」
同じように片方の手がじゅるじゅるしゃぶられ、勇気の手が消えていく。
「ああ……そんな……」
「いや、違うな。お前は存在すらしない」
「えっ……そんなはずは……」
「耳が無い人間なんていないからな」
慧音に耳がじゅるじゅるとしゃぶられ、また消えていく。
「あ……あ……」
消えかけたおちんちんからは失禁のように精子が漏れ出していた。
「そっちがお留守だったな。汚らしいおちんちんも喰ってやる」
慧音がいちもつを舐めると思いきや、玉を飴玉のように口の中で転がしていく。
「やめて！　そんな事したら……」
「何をやめるんだ？」
勇気の二つの金玉は綺麗に舐め上げられ、消えていた。
「そ、そんな……」
「これで何も出なくなって男も終わりだな」
「そんなのって……ないよ……」

慧音が続けていちもつを舐め続けるが、玉が無くなったせいで、精子すら出なくなっていた。快感を感じてもいちもつが何度か痙攣するのみだった。それすらも無くなっていき、快楽だけが走り続ける。
慧音によって身体の隅々まで舐められ、勇気の身体は頭のみとなった。
「もう無くなってしまうな。もう快感すら与えられなくなって残念か？　安心しろ、お前の身体、味は全て私が覚えている。食べたくなったらまたお前の歴史を作ってやる」
その舌によって顔がベロベロと舐められていく度に意識が曖昧になっていき、景色がもやになっていく。
――ここはどこ……ボクは誰？
――ダレ……ボク……ハ……ダ……

気がつけば……そこば暗い空間だった。
見回してもそこには何も無い。黒、黒、黒の景色。限りない無が広がっていた。
「ボク……死んじゃったのかな？」
「死んだのではない。お前の歴史を再構築したのだ」
そこにいたのは上白沢慧音の姿だった。いや、違う。その頭の上には牛のような角があり、腰には犬のようなふさふさの尻尾もあり、服の色も緑に変わっていた。
「貴方は……？」

「上白沢慧音……今は満月。ワーハクタクの姿になる」
「また……ボクを食べるんですか？」
思わず身構える勇気。
「食べない。今の私は歴史を創る程度の能力しか持っていない」
「歴史を……創る？」
「そうだ……新たなにお前の歴史を創り、外の世界に戻してやる」
「そんな事ができる訳……」
慧音が腕を振り下ろした刹那。暗い景色が真っ白に塗りつぶされ……意識が遠のいていく。
意識が潰れる刹那に思い出が走馬灯のように巡っていく。
――そうかボクは不良に追われ、事故で屋上から落ちた所を八雲紫に助けられた。そしてボクは選択を迫られたんだ。
――そして……ボクは……